

にでも簡単にできるからといって、デモがストライキや占拠といった、より激しい行動よりも劣るというわけではありません。

『森の生活』などで知られるとともに非暴力的抵抗の偉大な始祖であるハンリー・デヴィッド・ソローは、「歩く」ことをなにより重視しました。英語における散策（sauntering）とは、聖地への巡礼を口実に各地を流浪する人々に由来します。ソローはそこに、どこにも帰属することなく移動しつついる民衆たちの姿を見ました。だとすれば、デモで「ともに歩く」ことが、自分たちのなかにかつての民衆たちの姿をよびよせつつはいるのではないのでしょうか。

ソローはアメリカ南部の黒人たちが北米のカナダに逃走させる「地下鉄道」というネットワークにかかわっていたとして、ソローを愛読したキング牧師は「歩く」ことを人種差別の撤廃をもつめる公民権運動の主眼にしました。その最も成功した例は1963年に20万人を集めたワシントン大行進です。

公民権運動における行進というスタイルをつくったのは、黒人差別に心を痛めていたウィリアム・ムーアという白人の郵便配達夫に言われています。彼は「白人も黒人もいっしょに食事をしよう」というピクニックをにかけて南部のボルトモアから行進を始めてアラバマで射殺されましたが、その死後も行進はつづけられたそうです。

1965年には、公民権運動のなかである黒人青年が警察に射殺されたことに抗議して、アラバマ州のセルマという街から州都のモンテグメリーまで行進が行われ、最初は500人が参加しました。彼らは5日間休むことなくたて歩きつづけ、セルマから87kmも離れたモンテグメリーに着くころには、参加者は2万5000人以上にふくれあがっていました。

キング牧師は68年に暗殺されました。彼はその最後の演説で、聖書の中命記のモーゼの言葉を引き、自分たちをモーゼにひきいられて「約束の地」を目指したエジプトの奴隷たちにたとえました。これもまたデモの思想をしめしているかもしれません。どんな小さなデモでも、そこには人々が安らげる「約束の地」への願いがこめられていると考えることができます。

その時代には、アメリカのベトナム戦争への介入に反対するデモが世界にひろがる一方、フランスでの学生運動に端を発した叛乱が全社会をゆるがす「五月革命」など、世界のあらゆるところで体制や権威に対する反抗がまきおこりました。

自ら声をあげることで、社会が変わる

日本でも、安保条約の延長や沖縄の「返還」、あるいは大学のあり方などをめぐってさまざまな運動が社会を動かしました。デモははげしくなり、街頭は時にバリケードで占拠され、これを封じ込めようとする警察にたいしては石や火炎瓶が投げられました。さらに強力な武装をとなえる若者たちが登場したのも世界に共通していましたが、その帰結はほとんどが悲劇的なものでした。しかしこのときにあらわれた抵抗における暴力をどう考えるかという問題は、いまだ解かれたとはいえません。ただこのなかで、日本の「ベトナムに平和を！市民連合」にみられるように、市民が政党の枠をこえて街頭に出はじめたことは忘れられてはなりません。

そのころ、公害問題がはじめて大きな社会問題として注目されるようになりましたが、それも患者さんたちやその家族が自ら声をあげた



からです。水俣でチッソという企業の水銀の垂れ流しによって苦しめられた人たちは「怨」の旗をもって登場し、高度成長にうかれた日本の近代に根本から「否」をつきつけました。社会に新しい動きが生まれるとき、民衆の表現としてのデモも新しいスタイルをつくりだすのです。

これらのデモは過去の民衆たちの行動を思いおこさせるものでした。

歴史をさかのぼってみると、この国にも百姓一揆や世直し一揆など民衆の直接行動の例には事欠きません。というよりも、これらの運動をおこしうる民衆の潜在的な力こそが、歴史をつくりだしてきたのです。一揆では打ちこわしなどが主眼でしたが、江戸末期、仮装した民衆がはやしことばを連呼し、踊りくるいながら全国を移動した「ええじゃないか」は、デモンストレーションであるとともにストリート・パーティでもありました。

明治になってからは自由民権運動や、それに強い影響を受けた秩父の農民蜂起、富山の女性たちの蜂起にはじまる米騒動などが社会をゆるがしましたが、日本に本格的なデモが定着したのは大正デモクラシーの開放的な空気があふれた1920年代であるといわれています。このときの大きな課題のひとつは普通選挙権の実現でした。選挙権という今日あたりまえの権利さえ、その実現にけがりが必要だったのです。しかしその後、戦争へむかっていくなかで、これも認められない時代がつづきました。

戦争が終わると民衆たちの闘いは爆発しました。戦後の民主主義を守るために、あるいはこれをさらにおしすすめるために次々と新しい組織が生まれ、行動がよびかけられました。その先頭にたったのは日

本の植民地主義の犠牲となった在日朝鮮人たちであったことは忘れられてはなりません。

戦後、もっとも大きなデモが行われたのは1960年の日米安保条約改定阻止の運動でした。この時、国会前のデモには最大時でおよそ30万人が参加し、そのさなかに女子大学生が警察によって殺されるという事態にまでいたったのです。この運動を特徴つけたのは、それまでの政党などの枠をこえる学生や市民の大きな力でした。それがやがて、先に書いた60年代のうねりにつながっていくのです。

70年代にはいってからは、60年安保やベトナム反戦運動のような大きなデモはあまり見られなくなりましたが、そのかわり、もっと身近なテーマなデモも、こまごまと行われていきました。

つぎつぎと生まれる新しいスタイルのデモ

90年代後期、当時世界を支配し始めていたグローバリゼーションへの対抗運動がはじまります。99年のシアトルで行われたWTOの世界大会には5万人が集まって抗議し、会議を頓挫させました。この運動で重要なのは、行動をくみだてるプロセスにおける民主主義が重視されたことです。

社会の変革をめざすなら、まずそのような社会のモデルを運動の中でつくりあげなければならない。このようなスタイルは94年にメキシコのチアパスで烽火をあげた先住民の運動サパティスタからはじまったものですが、いまや多くの運動で共有されています。反グローバリゼーション運動は「リクレイム・ザ・ストリート」という街頭占拠やアドハスターズのような広告批判など、これまでにない抵抗のかたち



をうみだしていきました。

2003年、アメリカのイラクへの攻撃開始にたいして、ベトナム戦争以来の反戦運動が世界にひろがりました。日本でこの運動の中心になった若者たちは、自分たちのデモをバレードとよび、デモへの敷居を大きく下げること、それまでデモに参加しなかった若者たちを街頭へと誘ったのです。

この流れの中からはさらに新しいデモのスタイルが創りだされました。たとえばアーティストたちはベトナム反戦運動における岡本太郎の反戦ポスターにならって「殺すな」という行動を開始しました。また、そのアーティストや音楽関係者、さらにバレードのようなデモにあきたらない活動家がいっしょになって、サウンドシステムをのせた車を先頭にしたデモをはじめました。これはサウンドデモとよばれるようになりました。

このスタイルのデモはゲイ&レズビアン・ハレードやエコロジー系のデモなどですで行なわれていたので、決して珍しいものではありません。ただ違っているのは、イラク反戦のサウンドデモがはっきり路上の解放をうちだしたことです。

サウンドデモはやがてフリーター全般労働組合のデモなど若者のデモではありふれたスタイルとして定着していきました。

そうして3.11がやってきたのです。

参考文献：高橋衛『アメリカの革命』（平凡社）

J.M.ハートマン著 水谷八也訳『黒人差別とアメリカ公民権運動』（集英社新書）

H.D.ソロー著 飯田実訳『市民の反抗』（岩波文庫）

高相岩二郎『新しいアナキズムの系譜学』（河出書房新社）

プロフィール



TwitNoNukes <http://twitter.com/twitnonukes>

Twitterを介して組織された、脱原発デモを実行する有志のグループ。2011年の4月に平野太一がツイッター上にホストしたたったひとつのつぶやきに呼応した有志とその友人たちが中心となり、渋谷・原宿を中心とした脱原発デモを主催している。年齢は20代前半から50代まで幅広い。



SAYONARA ATOM <http://www.sayonara-atom.com/>

おもに20～30代の女性を中心としたアーティスト集団。イラストレーター・グラフィック・デザイナー、小物作家、家具デザイナーなどが3.11以降の脱原発運動のなかで出会う。脱原発をテーマにしたアートワークでデモや抗議活動の場をカフフルに装飾するほか、アートとジャーナリズムを橋渡しするような展示作品が、各種イベントでも話題を呼んでいる。

松沢呉一

1958年生まれ。ライター。学生時代は新左翼から市民運動まで幅広くデモや集会通いを趣味とし、卒業後、「アトミック・カフェ・フェスティバル」の呼びかけメンバーに。福島原発の事故により、約1か月家からも出られないほどのショックを受けるが、「素人の乱」による高円寺のデモを契機にほとんど毎週のようにデモに出かけている。

毛利嘉孝

1963年生まれ。東京藝術大学准教授。専門は社会学、メディア文化研究。特に音楽や現代美術、メディアなど現代文化と都市空間の構成や社会運動をテーマに批評活動を行なう。主著に『ストリートの思想』『文化＝政治』など。

立花 栄

1961年生まれ。たまにアクティヴィスト。60～70年代の運動史を趣味で研究している。

